

平成 24 年 11 月 6 日

卒業論文・研究・制作、公開発表・ショー、修士・博士論文

学長 木元 幸一

11 月に入ると、卒業生は卒業研究、卒業論文、卒業発表、ファッションショーやミュージカル、大学院生は修士論文や博士論文の仕上げに向かって血眼になって相当頑張っている人達がいるはずです。これは、高等学校までにはなく、大学生になって始めて取り組む大変貴重な経験です。今までは、科目ごとに学んできた専門的知識を科目ごとに考えて担当の先生が期待するような答えを導き出せば良かったのですが、今度はあるテーマ（課題）を解決するために、今まで各科目として学んできたすべての分野を自分の頭の中で統合し、知恵と技術を駆使して総合的に探求していかなければなりません。卒業研究、卒業論文、ファッションショーやミュージカルのような卒業発表も今までに学んだ全てのことの集大成としての意味を持ちます。

卒業学年の方々はまだここまで進んできて既に気がついてきたと思います。卒業研究、卒業論文はある一人の先生に付いて指導を受けます。しかし、そのテーマや課題の探求のためには、その先生から授業で教わった専門領域をおさらいするだけでは解決できません。例えば栄養関係で言うと、機能性食品関連のことをテーマとして選ぶと、勿論食品学の知識を必要とします。さらに機能ですから人体への影響を調べなくてはなりませんから、人体についての理解が必要となりますが、人体も臓器・組織としての理解は解剖生理学で学び、体内でどう変化しどういう役に立っているか、その分子的なメカニズムは生化学です。さらに健康や疾病に関わることが多いですから臨床栄養や病態的なことも関わってきます。本を調べるだけでは研究になりません。人体への影響を調べる前にまず動物実験で確認してからということになり、動物飼育と観察、血液データ、臓器データ等を取ります。データを取るだけでなくデータの持つ意味を把握していることです。ようやく人間への応用という時には調理学、加工学の知識・技術が物を言うこととなります。そして、テーマとして選ぶ理由を考えると、今の我が国の（世界の？）健康状態や食環境状況が背景として存在しており、探求課題として選んだ意義の大きさが測られることとなりますので、公衆栄養や公衆衛生としての視点も底流にはいけません。何かテーマを決めてそのことを探求していくということは、多岐に渡る知識と技術を問われており、それらがあるテーマのもとで今までの授業や教科の垣根を超えて、自分の中で統合し、自分なりに体系化して、組み立てていく作業が必須となってきます。結局、今までに学んだ全てのことが関わってきますのでどの先生についても同じとも言えます。ファッションショーやミュージカルは多くの先生による多岐に渡る指導を受けているので既にお分かりのことと思います。こんな貴重な経験は大学に入って始めてできるのであり、卒業してからではすでに遅く、人生においても二度と経験できないと思います。

卒業研究等は極めて重要なものです。クラブ活動と似ていて一生懸命に取り組んだ人にはそれなりの大きな満足できる成果が得られます。皆さんには、自主的、能動的な学習態度が望まれます。私が担当していた時には、私の卒論を希望する学生にどのくらい真剣に取り組む気持ちがあるかを重視いたしました。アルバイトが中心で卒論が 2 番目か 3 番目という場合は遠慮してもらいました。これは単なる時間に対する比重の置き方の問題ではなく心の持ち方によるものです。時間というのはあるのではなく作るものですからバイトをやっているとできないというのは口実に過ぎません。担当の先生は、指導はし

ますがやるのは自分です。自分がやらなければ全く進みません。どれだけ真剣に考え、その重要性を理解し、時間を捻出する努力をする気があるのかが目安となります。目的・目標を持ち、計画性をもって学生生活を送ることの重要性に気づいてもらいたいと思います。

最後までやりぬく力も不可欠とされます。自分は勉強したという自己満足でなく社会一般の批判と評価を受けて完成といえるものです。また、授業よりもレベルが高く、高度な機器や貴重な資料、データを出すために多くの経費がかかりますので無駄使いはできません。先生たちの多くは、会社や公共機関との共同研究を展開し、資金の支援も受けている場合が多いので社会的責任も伴います。途中でやめてしまったものはゼロになってしまうので、結果だけでなくそこまで費やした経費も全く無駄になってしまうのです。卒業研究・論文等は、授業の次元とは別物であり、社会から付託された困難な課題を解決する一翼を担うという重大な使命を帯びている場合があります。勘違いしてはいけないのは、期待した結果が出なかったというのは残念かもしれませんが、決して無駄ではなく、そうではないという貴重な証明が得られたということです。何より大事なことは、気まぐれではなく最後までやり抜き、何れにせよ結果が出るところまで終えるということです。

自分自身の興味の探求で終わりではなくプレゼンテーション力が要求されます。ゼミを通して、自分が調べたことの解釈について他者の批判を受けたり、自分が選択したアプローチ法が的確であるかどうかについてディスカッションを繰り返して確認します。仲の良いあまり説明の要らない気心の知れた友達とのおしゃべりとはちょっと違います。客観的であること、専門的なレベルを維持しながらも、聞いている人達が理解できるように話せなければ意味がありません。自分の考えも伝えられなければいけませんので、当然、質問にも正確に答えられるようになるためには、自分自身が疑問のないように勉強し尽くさねばなりません。このプレゼンテーション能力を鍛えるということは基本的に最も大事なことです。

テーマが異なっても数人が一つの部屋を使って取り組みますので、お互いに礼儀を守り、大人としての付き合い方、コミュニケーション力も大切となり、この機会に自然に身につけて欲しいことです。仲間というより高い志を持った同志的関係の繋がりに近いと思います。

今回はつい力が入って長々と書き綴ってしまいました。卒業期のこの経験は、今取り組んでいる人もこれからの在校生にも本当に大切な経験であることをもう一度強調して今回の学長便りを終えたいと思います。最後まで読んでくれた方々に感謝致します。